

幌延問題とは

1981年の原発誘致問題から核廃棄物関連施設誘致へと進んだ動きに対して、酪農の町幌延の40年以上にわたる反対運動は今も続いています。この間、「貯蔵工学センター計画」（高レベル放射性廃棄物処理実験施設）から、処分の研究のみとする「深地層研究計画」へと内容を変えつつ、強行的に事業が進められてきました。道民の反対がある中で、2000年10月に北海道は「核を持ち込まない」いわゆる核抜き条例（注1）を前提に、深地層研究を受け入れてしまいました。そして、道と幌延町と核燃料サイクル開発機構（現・日本原子力研究開発機構）は、「放射性廃棄物を持ち込まないこと」「研究終了後は地下施設を埋め戻すこと」「中間貯蔵施設を将来とも設置しないこと」などを決めた3者協定を結んでいます。

現在幌延町には、深地層処分にむけた試験データの収集を行う深地層研究センター（地下研究施設）R施設「ゆめ地創館」、ガラス固化体の多重バリアを実際の規模で展示する実規模施設があり、地下研究のために二つの坑道が掘られ、ガラス固化体をどのように設置するか、放射性物質が地下でどう移動するか等を研究しています。開始当初は2020年度で終了する計画でしたが、「研究の進捗は順調」としてきたにも関わらず、9年間の延長がされました。350mまでだった坑道も500mまで掘り進みました。いつまでも核関連施設があることでなし崩し的に処分場へと進んでしまわないよう、研究の終了と埋め戻しを求めているとはいえません。

注1）北海道における特定放射性廃棄物に関する条例

「深地層処分」とは

日本では、原発の運転によって生じる使用済み核燃料を再処理した後に残る、核分裂生成物（死の灰）を含んだ廃液を耐熱ガラスと混ぜてステンレスの容器に埋め込んだ「ガラス固化体」を「高レベル放射性廃棄物」と呼んでいます。100万キロワットの原発を1年間運転するとガラス固化体にして30本ほどの高レベル放射性廃棄物が出来ます。このガラス固化体には1本で数億人に癌を起こさせるだけの放射能が含まれており、20秒ほどそばに立っているだけで命を落とすほど放射能が強いと政府は発表しています。このガラス固化体を30～50年中間貯蔵した後、地下300メートルより深い岩盤の中に埋め捨てるのが日本の方針で、この処理方法を深地層処分といいます。

深地層処分は、人の手によって生み出された危険な「核のゴミ」を、人の目の届かないところに埋め棄ててしまうというものです。放射能が漏れ出さない保障はなく、管理もできません。手に負えないものを負の遺産として未来に託そうとする、無謀で無責任な処分方法に私たちは反対しています。

幌延サマーキャンプの取り組み

札幌から5時間の、人口2040人※のまち幌延。これまでにたくさんの組合員とその家族が、幌延問題を知る機会として幌延サマーキャンプを行ってきました。地元の人たちと交流を深め、町内一軒一軒を訪問し、「札幌からきました。核のゴミについて私たちも考えています、お話を聴かせてください」こんな言葉をかけながら私たちの思いを伝えてきました。これからも地元の人たちと共に反対運動を続けていきます。 ※2024年11月現在

